

Title	寺出道雄「マルクスの剰余理論」：批判
Sub Title	Marx's theory of surplus : a comment
Author	細田, 衛士
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1990
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.82, No.4 (1990. 1) ,p.923(255)- 925(257)
JaLC DOI	10.14991/001.19900101-0255
Abstract	
Notes	批判・ 応答
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19900101-0255

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

寺出道雄「マルクスの剰余理論」：批判*

細 田 衛 士

1. 経済学において剰余理論が重要であることは言うまでもない。剰余は資本蓄積の源泉であり、経済成長の必要条件である。多くの経済学者が剰余理論の研究に力を注いできたのも、ひとつにはそのような理由からである。

しかしそれと同時に、経済学者の見解がわかるのもこの剰余理論のとり扱いにおいてなのである。寺出道雄氏（1989）は、「マルクスの剰余理論」の中で、マルクスの剰余理論を批判的に検討し、あわせて剰余理論と労働価値説の結びつきの必然性について論じている。

2. 寺出氏は、パンネッティ＝カルドア型のリカード穀物モデルを用いて、剰余の存在条件を示している。上記論文と同じ記号を用いれば、その条件は、

$$\frac{f(N)}{N} > X \quad (8-2)$$

である。ここで $f(\cdot)$ は生産関数、 N は労働量、 X は生存賃金である。（8-2）はまた、

$$\frac{1}{X} > \frac{N}{f(N)} \quad (8-3)$$

と書きかえることができる。（8-3）は、支配労働が投下労働より大であることを示している。あるいは、この条件は

$$1 > \frac{N}{f(N)} X \quad (8-4)$$

とも同値である。これは、「労働者が生産過程において投下した労働量が、労働者が賃金の形態で回収した労働量よりも大であること」（同論文70頁）を示している。つまり、剰余すなわち利潤及び地代の存在は、剰余労働の存在と同値なのである。

しかし寺出氏も指摘しているように、（8-4）は（8-2）、（8-3）とも同値なのである。このことは、剰余の存在と剰余労働の存在の同値性は労働価値説とは独立であるという著者の主張の中に端的に表現されている。しかし、あえて労働価値説にその意義を見出すとするならば、それは、労働価値説が剰余理論と結びついたときに「他人の剰余労働の領有という“不平等”をもたらさざるをえない」資本制社会の強烈な批判となりうるという点においてであろう。

3. 更に寺出氏は、剰余存在の条件は、理論的には労働の観点からばかりでなく、資本・土地の観点からも捉えることができると述べている。資本から見た場合

$$K > \frac{K}{f(N)} P \quad (9-2)$$

* 本欄は、寺出道雄「マルクスの剰余理論」（本誌82巻3号）への批判である。〔編集委員会〕

* 本稿の最終稿作成にあたり、編集委員会委嘱のコメンテーターから貴重なコメントを頂いた。また、いくつかの誤りも指摘して頂いた。ここに筆者は編集委員会ならびにコメンテーターに対し心からの謝意を表すものである。

が剰余の存在条件であり、土地から見た場合

$$L > \frac{L}{f(N)} R \quad (10-2)$$

が剰余の存在条件となる。ここで K , L , P , R はそれぞれ資本量, 土地投入量, 利潤, 地代である。

それでは「理論的に全く平行的」である剰余存在の条件の中で、なぜ労働量による表現が剰余理論と結びつくのであろうか。著者によれば、「直接的生産過程における資本家と労働者との支配・被支配の関係の存在という視角から事態が観察されたとき」意味をもつからなのである。そして、利潤・地代の存在は剰余労働に基づくという命題が意味をもつのは、「マルクスが、その直接の批判対象であったリカードとともに、労働価値説に立脚していたから」であると結論づけているのである。

4. 理論の道筋は大体において正しいにもかかわらず、寺出氏の結論は甚だ不徹底であるように思われる。寺出氏も正しく指摘するとおり、剰余の存在条件は、リカード的 (8-2) にも、マルサスの (8-3) にも、マルクスの (8-4) にもとらえることができる。それらは全く同様なことを示している。とするならば、資本制社会の不平等を説明する手段として労働価値説がなぜマルクスにおいて必然的なのかははっきりしないのである。この不平等は、純粋に数量的にも捉えられるのであり、支配・被支配の関係も労働価値説によらずとも説明できるのである。

このモデルでは、最劣等地では地代は生ぜず、しかも資本というのは労働者に前払いされた賃金の合計である。すなわち、最劣等地では (ここで諸変数が決定されるのであるが)、労働という要素のみが本質的に生産に貢献しているのである。地代が生じない限界地で労働者が生産を行い、しかも剰余が発生しているとしたら、これは労働者がその限界生産力、すなわち労働の生産への貢献分を下回る賃金しか受けとっていないことを示す。 $f'(N) - X$ は資本家によって搾

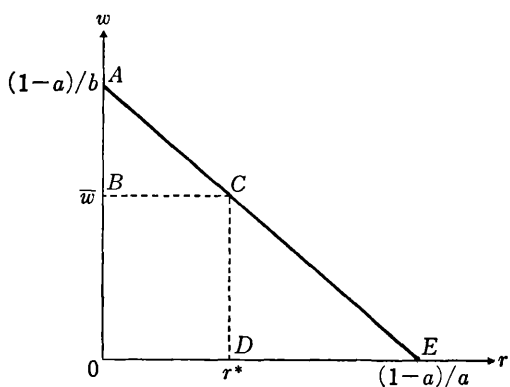
取されたのであり、これが限界地での利潤になっている。しかし勿論この説明は労働価値とは無関係である。したがって、資本主義社会の不平等制批判と労働価値説との結びつきは、必ずしも必然性をもたないのである。

5. 次に、剰余を3つの角度から平行的に扱うという著者の方法を見てみよう。ここで、論点を明らかにするために、著者のモデルを離れてもっと容易なモデルを用いる。土地の存在を無視し、 (a, b) をある財1単位を生産するために必要な資本量, 労働量とし、この係数は固定的であると考え。更に、資本は1年ですべて摩耗するものとしよう。(この仮定は本質的でない。) すると、財の価値と費用の関係として、

$$1 = (1+r)a + \bar{w}b \quad (A-1)$$

という式が成立しなければならない。これを図示すると下のようになる。ここで r は利潤率, $\bar{w}$ は生存賃金率 (財で測った) である。(A-1) は、また次のように書きかえられる。

$$1 - a = ar + \bar{w}b$$



上式の左辺は純生産物を表す。したがって上式は、純生産物が利潤部分 ar と賃金部分 $\bar{w}b$ に分配されていることを表すのである。寺出氏の (8-4) は

$$\bar{w} < \frac{1-a}{b} \quad (A-2)$$

であり、(9-2) はここで

$$r < \frac{1-a}{a} \quad (\text{A-3})$$

となる。(A-2)と(A-3)は、論理的に「平行的」に見える。しかし、実質的にはそうではない。図からわかる通り、OBが生存のために必要な賃金部分であり、ABは剰余部分である。このABの部分は利潤として資本家に帰属する。それでは、資本にとって必要部分と剰余部分はどこで表されるのであろうか。それはODやEDではない。DがOE上のどこに決まろうが資本は再生可能であるからである。そもそも「剰余」という概念は、「必要」という概念の双対的概念であると思われる。したがって、通常通り資本に「生存必要利潤」が無いとするならば、資本の観点から剰余をとらえるという発想は、労働の観点から剰余をとらえるという発想と平行的では無いのである。(A-3) (つまり(9-2)) は、単に純生産物の一部を労働者に分配するための条件にすぎないように思われる。

6. さて最後に、剰余利潤・地代の存在と剰余労働の存在の同値性は自明だとする著者の主張について検討してみる。確かに、リカード的な1財モデルではそう見えるかもしれない。しかし多部門結合生産経済を考えると必ずしもそうではない。Steedman (1975), (1977) が示しているように、利潤と存在と剰余労働の存在は同値ではないのである。勿論 Morishima (1974) のように、価値を線形計画法の解として再定義することによってこの点を克服することができる。しかしこの場合、価値の加法性が損なわれてしまい、Morishima の定義した価値は、普通我々が考える価値とは意味合いが著しく異なってしまうのである。1財モデルでは自明の関係であったものも、より複雑な体系では自明ではなくなるのであり、この点で著者の主張は行き過ぎているように思えてならないのである。

参 考 文 献

- 寺出道雄 (1989) 「マルクスの剰余理論」『三田学会雑誌』82巻3号 pp. ?-?
 Morishima, M. (1974) "Marx in the Light of Modern Economic Theory," *Econometrica*, Vol. 42, pp. 611-632.
 Morishima, M. and G. Catephores (1978) *Value, Exploitation and Growth*, McGRAW-HILL.
 Steedman, I. (1975) "Positive Profits with Negative Surplus Value" *Economic Journal*, Vol. 85, pp. 114-123.
 Steedman, I. (1976) "Positive Profits with Negative Surplus Value: A Reply," *Economic Journal*, Vol. 86, pp. 604-608.
 Steedman, I. (1977) *Marx after Sraffa* (NLB)

(経済学部助教授)